

目 次

2007/2008 年度（第 12 期）役員選挙の実施.....	1
日本中東学会第 23 回年次大会参加申し込み等について.....	3
日本中東学会奨励賞規定の制定と第 1 回選考について.....	8
2006 年度第 2 回理事会報告.....	10
第 11 回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす （2）地方における中東・イスラーム」報告.....	12
日本中東学会年報（AJAMES）編集委員会から.....	13
第 15 回韓国中東学会国際会議参加報告.....	14
第 56 回パグウォッシュ会議年次大会に参加して（栗田禎子）.....	24
寄贈図書.....	26
2007 年度会費納入のお願い.....	26
事務局より.....	27

2007/2008 年度（第 12 期）役員選挙の実施

日本中東学会会則第8条および細則VIII.に基づき、2007/2008年度（第12期）役員選挙を実施します。

本年度第2回理事会の決定により、有権者は、2007年1月19日までに2006年度会費を納入した正会員（退会予定者を除く）となります。各会員にはすでに2007年1月1日現在の暫定有権者名簿、2006年度会費未納の方には郵便振替用紙を郵送いたしました。暫定有権者名簿と納入記録に異議のある方は、1月23日までに学会事務局にご連絡ください。

選挙管理委員は次の方々が委嘱されました。

山下王世監事、小林春夫、小副川琢、齋藤久美子の各正会員

今回の役員選挙の日程は次の通りです。皆様のご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

< 日程 >

- 1月19日（金） 役員選挙有権者資格のための2006年度分会費納入最終締切。
これに基づいて、最終有権者名簿を作成します。
- 1月26日（金） 評議員選挙のための投票用紙を発送。投票用紙を紛失した場合
有権者は2月2日（金）までに選挙管理委員会に連絡すれば再交付を受ける
ことができます。
- 2月10日（土） 投票用紙の受付締切（必着）。
- 2月14日（水） 評議員選挙開票。
- 2月16日（金） 評議員当選者に理事選出のための投票用紙を発送。
- 2月26日（月） 理事選挙受付締切（必着）。
- 2月28日（水） 理事選挙開票。
- 3月中旬 新旧合同理事会、新会長・事務局の選出および引継ぎ。

< 役員選挙関連の会則と細則 >

会則第8条

- (1) 会長は理事の中から、互選によって定める。
- (2) 評議員は一般会員の中から、正会員の投票により選任する。
- (3) 理事は評議員の中から、互選によって定める。但し、理事会は会員の中から
特定の任務など必要に応じて理事若干名を追加することができる。
- (4) 監事は理事会の推薦をへて、総会において選任する。

細則VIII. 役員選挙について

- 1. 理事会指名による4名（監事1名を含む）が選挙管理委員会を構成するものとする。
選挙管理委員会は、評議員、理事の選挙を実施・管理するものとする。
- 2. 選挙によって評議員60名以内、理事13名を選出するものとする。
- 3. 同点の場合の選出法は、抽選によるものとする。

日本中東学会第 23 回年次大会参加申し込み等について

参加および懇親会申し込みについて

ニュースレター108号でお知らせしましたように（学会ホームページにも掲載されています）本号ニュースレターには、日本中東学会第23回年次大会への出欠通知、懇親会・弁当（昼食）の申し込みを兼ねた郵便振替用紙が同封されています。大会に参加される方はこの振替用紙をご利用の上、4月10日までに参加費をお払いください（研究発表希望の方の参加費納入締切は、後述のとおり、これより早く2月末日です）。また、懇親会費、弁当代などの納入も同封の振替用紙をご利用ください。諸費用はできる限り前納をお願いします。

参加費は1,000円、懇親会費は5,000円（学生会員は4,000円）弁当代は1,000円です。なお、事前にお振込みいただいた諸費用は返却に応じかねますので、その点もご注意ください。

研究発表受付に関して

大会研究発表の受付に関しましては、51名の発表を承認いたしました。積極的なご応募にお礼を申し上げます。

実行委員会では大会の暫定的なプログラムを別表のように作りました。ただしこれは発表タイトルを含めあくまで仮のもので、今後発表予定者の都合などにより、若干の変更がなされる可能性があります。現時点で、ご参考までにお知らせします。

なお、最終的なプログラムと会場近郊のホテル案内、出張依頼状、総会議決の委任状などは3月下旬にお手もとにお届けする予定です。

【日本中東学会第 23 回年次大会暫定プログラム】

1日目

13:40-15:10	講演
15:20-17:20	シンポジウム
17:30-18:20	総会
18:30-20:00	懇親会

2日目

第1部会

9:30-10:10 (1-1) 鳥山 純子（お茶の水女子大学大学院）

「現代カイロのメイク事情: ブランド志向に見る女性らしさとイスラーム」

- 10:10-10:50 (1-2) 後藤 絵美 (東京大学大学院)
「ニカーブを手にとるまで 現代エジプトにおけるムスリム女性のヴェール着用と宗教権威」
- 10:50-11:05 コーヒーブレイク
- 11:05-11:45 (1-3) 河野瀬 功 (神戸大学大学院)
「エジプト・米国関係 (1957-1960) 協調と対立の間」
- 11:45-12:25 (1-4) 鈴木 恵美 (東京大学)
「エジプト立憲王政期の社交クラブ 政治の裏舞台における名望家ネットワーク」
- 12:25-13:30 昼食
- 13:30-14:10 (1-5) 柏木 健一 (筑波大学北アフリカ研究センター)
「エジプトの人口動態と経済成長」
- 14:10-14:50 (1-6) 岡戸 真幸 (上智大学大学院)
「アホワとガマイーヤ アレクサンドリア移住者社会における地方出身者による拠点の形成」
- 14:50-15:30 (1-7) 竹村 和朗 (企業勤務)
「砂漠開拓から見た現代エジプト: 歴史的経緯と現状、および研究の方向性について」
- 15:30-15:45 コーヒーブレイク
- 15:45-16:25 (1-8) 縄田 浩志 (鳥取大学乾燥地研究センター)
「スーダンの飢餓・内戦へのまなざし: 写真<ハゲワシと少女>撮影時の状況を探る」

第2部会

- 9:30-10:10 (2-1) 吉岡 明子 (日本エネルギー経済研究所中東研究センター)
「イラク民主化プロセスの蹉跌」
- 10:10-10:50 (2-2) 山尾 大 (京都大学大学院)
「現代イラクにおけるシーア派革命思想: ムハンマド・バーキル・サドルとイラクの政治変動を中心として」
- 10:50-11:05 コーヒーブレイク
- 11:05-11:45 (2-3) 見市 建 (岩手県立大学)
「イスラーム主義の世界潮流における東南アジアのジャマア・イスラミヤ」
- 11:45-12:25 (2-4) 岩坂 将充 (上智大学大学院)

「トルコにおける軍とアタテュルク主義：転換点としての 1971 年クーデタ」

- 12:25-13:30 昼食
- 13:30-14:10 (2-5) 錦田 愛子(総合研究大学院大学大学院 / 日本学術振興会特別研究員)
「ヨルダンのパレスチナ住民にみられる帰還権をめぐる意識」
- 14:10-14:50 (2-6) 矢野 可奈子(京都大学大学院)
「テータたちの語るパレスチナのハストリーズ 剥奪・排除・表象に対する挑戦として」
- 14:50-15:30 (2-7) 池田 有日子(日本学術振興会特別研究員 / 京都大学地域研究統合情報センター特別研究員)
「1930年代におけるアメリカ・シオニスト運動指導部のパレスチナへの対応」
- 15:30-15:45 コーヒーブレイク
- 15:45-16:25 (2-8) 金城 美幸(立命館大学大学院 / 日本学術振興会特別研究員)
「1990年代イスラエルにおける『ポスト・シオニズム』論争についての考察」
- 16:25-17:05 (2-9) Abdul Latif Zoya (Graduate School of Tokyo Metropolitan University)
“The Elements of Urban Form in eastern sector of Old Saida The Hammoud family Architecture and Heritage”

第 3 部会

- 9:30-10:10 (3-1) 小野 仁美(東京大学大学院)
「イスラーム法における乳母の雇用契約」
- 10:10-10:50 (3-2) 嶺崎 寛子(お茶の水女子大学大学院)
「現代エジプトにおけるファトワー」
- 10:50-11:05 コーヒーブレイク
- 11:05-11:45 (3-3) 長岡 慎介(京都大学大学院 / 日本学術振興会特別研究員)
「イスラーム金融制度の成立とその展開」
- 11:45-12:25 (3-4) 上山 一(一橋大学大学院)
「中東におけるイスラーム金融の発展可能性 イスラーム銀行とイスラーム保険の場合」
- 12:25-13:30 昼食
- 13:30-14:10 (3-5) 岡井 宏文(早稲田大学大学院)
「在日ムスリムのネットワークの現在 モスクを中心として」

- 14:10-14:50 (3-6) 店田 廣文 (早稲田大学)
「在日ムスリム学生の信仰と生活」
- 14:50-15:30 (3-7) 小島 宏 (国立社会保障・人口問題研究所)
「『ムスリム』男性と日本人女性配偶者の労働供給 2000年国勢
調査個票の分析」
- 15:30-15:45 コーヒーブレイク
- 15:45-16:25 (3-8) ブカーリ、イサム (早稲田大学大学院 / アラブ・イスラーム学
院)
「アラブ諸国における科学・技術の現状とその課題」
- 16:25-17:05 (3-9) 和氣 太司 (日本学生支援機構)
「サウジアラビアにおける技術教育改革の展開と課題」

第4部会

- 9:30-10:10 (4-1) 竹田 敏之 (京都大学大学院)
「現代標準アラビア語の形成とアラビア語アカデミーの役割」
- 10:10-10:50 (4-2) 鷺見 朗子 (京都ノートルダム女子大学)
「アラビア語教授法研究の動向」
- 10:50-11:05 コーヒーブレイク
- 11:05-11:45 (4-3) 細田 和江 (中央大学大学院)
「ヘブライ文学におけるカナン運動」
- 11:45-12:25 (4-4) 外川 昌彦 (広島大学)
「中世のインド社会におけるイスラームとの遭遇 チャイタニ
ヤ(1486-1533)の事跡から」
- 12:25-13:30 昼食
- 13:30-14:10 (4-5) 五十嵐 大介 (日本学術振興会特別研究員・東洋文庫)
「マムルーク体制とワクフ」
- 14:10-14:50 (4-6) 山下 真吾 (東京大学大学院)
「15世紀オスマン朝における『カザー』記述の問題」
- 14:50-15:30 (4-7) 宮下 遼 (日本学術振興会特別研究員 / 東京大学大学院)
「『酒の書』に見る酒宴：16世紀オスマン朝詩人たちを中心に」
- 15:30-15:45 コーヒーブレイク
- 15:45-16:25 (4-8) 吉田 達矢 (明治大学大学院)
「『改革勅令』発布後のオスマン政府の非ムスリム統合政策 「東
方正教総主教座法」作成に関する考察」
- 16:25-17:05 (4-9) 三沢 伸生 (東洋大学)
「日本・オスマン朝関係史にかかわる文書史料」

第5部会

- 9:30-10:10 (5-1) 登利谷 正人(上智大学大学院)
「アフマド・シャー・ドゥッラーニーのインド遠征について」
- 10:10-10:50 (5-2) 宮澤 栄司(上智大学アジア文化研究所客員研究員)
「中央アナトリアのチェルケス人にみる社会的記憶」
- 10:50-11:05 コーヒーブレイク
- 11:05-11:45 (5-3) 杉山 隆一(慶應義塾大学大学院)
「サファヴィー朝期におけるイマーム・レザー廟のワクフ」
- 11:45-12:25 (5-4) 前田 弘毅(北海道大学スラブ研究センター)
「バルサダン・ゴルギジャニゼの『グルジア史』」
- 12:25-13:30 昼食
- 13:30-14:10 (5-5) 小澤 一郎(東京大学大学院)
「軍制改革と近代イラン アッバース・ミールザーの西欧化改革」
- 14:10-14:50 (5-6) 前田 君江(東京大学)
「トゥーデ党(イラン共産党)の文学イデオロギーと新体詩」
- 14:50-15:30 (5-7) 浅村 卓生(東北大学大学院)
「1934年正書法会議におけるウズベク語の母音調和表記問題」
- 15:30-15:45 コーヒーブレイク
- 15:45-16:25 (5-8) 大庭 竜太(京都大学大学院)
「現代トルコにおけるクルド・イスラーム主義の潮流とクルド人問題」

第6部会

- 9:30-10:10 (6-1) 私市 正年(上智大学)
「Zawiya al-Hamil と独立戦争 植民地期アルジェリアのスーフィー教団・聖者崇拜の役割再考」
- 10:10-10:50 (6-2) 高橋 圭(上智大学アジア文化研究所客員研究員)
「近代エジプトにおけるタリーカとワクフ行政」
- 10:50-11:05 コーヒーブレイク
- 11:05-11:45 (6-3) 高尾 賢一郎(同志社大学大学院)
「シリアの前グラント・ムフティー、シャイフ・アフマド・クフターローの研究 そのスーフィーとしての側面、思想を中心に」
- 11:45-12:25 (6-4) 相島 葉月(オクスフォード大学大学院)
「現代エジプトにおけるイスラーム的知の生産と消費」

- 12:25-13:30 昼食
- 13:30-14:10 (6-5) 三代川 寛子 (上智大学大学院)
「現代エジプトにおけるコプト・キリスト教徒」
- 14:10-14:50 (6-6) 森下 信子 (東京大学大学院)
「中世イスラム世界へのヘレニズム的影響の一側面 『サラマーンとアブサール物語』」
- 14:50-15:30 (6-7) 柳谷 あゆみ (東洋文庫研究部イスラーム地域研究資料室)
「ザンギー朝ヌール・アッディーンの対スゲール、ディヤール・バクル政策」
- 15:30-15:45 コーヒーブレイク
- 15:45-16:25 (6-8) 中町 信孝 (日本学術振興会特別研究員 / 早稲田大学大学院)
「アイニーの諸年代記にみられる自伝的記述」

研究発表予定者の方へ

前号ニューズレターでお知らせしましたように、発表予定者の方は2月末日までに、発表要旨原稿(詳細は以下)の提出と参加費の振込みをお願いいたします。期日までにこの2条件が満たされないときには、発表をお断りすることがありますのでご注意ください。

〔発表要旨執筆要綱〕

1. 要旨は大会当日配布される要旨集に掲載します。
2. 分量は、和文 1,000 字、英文 350 words 以内とします。
3. 日本語の発表には必ず英文要旨もつけてください。
4. 和文、英文とも題名、名前、所属、要旨本文の順序で書いてください。ただし、所属の書き方等、書式は統一性を保つため、こちらで編集する場合があります。フォント、行数等についてもこちらで決定します。
5. 英文のブラッシュアップ、ネイティブ・チェックは大会実行委員会では行いません(簡単なスペルミス等を除く)。各自の責任で行ってください。
6. アラビア語転写などの特殊文字は用いないでください。
7. 書式なし(=シンプル)テキスト・ファイルで、E-mail に添付して、大会事務局アドレス(kitagawa@mail.tains.tohoku.ac.jp) に2月末日までにご送付ください。
(第23回年次大会実行委員長 木村 喜博)

日本中東学会奨励賞規定の制定と第1回選考について

日本中東学会は昨年度の年次総会で日本中東学会奨励賞の設置を決め、本年度の総会では、理事会が規定を作成し、これに従って選考を行うことが事業計画として承認されました。このたび、理事会による奨励賞規定の策定が完了いたしましたので、お知らせいたします。

第1回選考は、全評議員による候補作の推薦(2007年2月末まで)から始まります。評議員の皆さんには、すでに事務局から推薦書のフォームなどをお送りいたしました。ご協力のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

【日本中東学会奨励賞規定】

- 第1条 この賞は日本中東学会奨励賞と称する。
- 第2条 この賞は日本中東学会の若手会員の優れた研究成果の国際的な発信を奨励し、本学会の国際的な交流を促進することを目的とする。
- 第3条 この賞は2年に1度、1名に授与し、正賞(賞状)と副賞(奨励金20万円)とからなる。奨励金は学会の奨励基金から支出する。
- 第4条 奨励賞の対象は当該2年間に『日本中東学会年報』に掲載された外国語による論文とする。ただし、他の媒体によって出版された外国語の論文および著書のなかに特に優れたものがある場合には、これを選考対象に加えることができる。
- 第5条 受賞の有資格者は対象となる著作の刊行時において40歳以下の学会員とする。
- 第6条 最終選考は理事会の指名した委員3名からなる選考委員会で行う。選考方法は別に定める細則による。
- 第7条 受賞者の発表と奨励賞の授与は選考年度の総会において行う。

【日本中東学会奨励賞選考細則】

1. 受賞対象作の「刊行時」とは、該当する出版物の奥付に記された年月日をいう。
2. 第1回の奨励賞は2005-2006年間に刊行された著作を対象とし、受賞者の発表と奨励賞の授与は2007年の総会において行う。以後、2年ごとの対象期間を設ける。
3. 選考は受賞の有資格者を除く評議員が各1点の候補作を授与年度の2月末までに選考委員会に推薦理由を添えて推薦し、選考委員会はこれを受けて最終選考を行う。
4. 選考委員会は最終選考の結果を会長に報告し、会長はこの結果をすみやかに受賞者に伝える。

2006 年度第 2 回理事会報告

10 月 29 日に 2006 年度第 2 回理事会が開催され、以下のことが討議・決定されました。

日時 2006 年 10 月 29 日（日）16:00～20:00

場所 お茶の水女子大学文教育学部 1 号館 1 階会議室

出席 三浦徹会長、飯塚正人、臼杵陽、栗田禎子、小松久男、酒井啓子、長沢栄治、林佳世子の各理事

欠席 赤堀雅幸、加藤博、小杉泰の各理事

議題

1. AJAMES の編集について（ 13～14 ページに関連記事）

- ・ 22-1 号は予定より若干遅れて 8 月に刊行された。欧文率は 69.3%。現在は 06 年 12 月の刊行を目指して 22-2 号の編集を進めている（ただし、若干刊行が遅れる見込み）。英文学会活動報告の入稿については国際交流委員会にお願いする。なお、本年度は AJAMES に掲載する英文学会活動報告をもって英文ニューズレターに代え、英文ニューズレターは別途発行しないことを理事会で決定した。両者の内容がほぼ重なる見通しのため。
- ・ 国立情報学研究所における AJAMES の電子化作業は、先方の事情により、当初予定より遅れているが、20-1 号から 21-1 号についてはテキスト全文が CiNii [サイニイ]（<http://ci.nii.ac.jp/>）に掲載されている。
- ・ CiNii が世界的な学術ポータルサイトとなりつつある Google-Scholar に書誌情報、欧文抄録データを提供する方針であることに鑑み、12 月 20 日に投稿を締め切る 23-1 号以降の AJAMES には、100～200 ワードの英文要旨を論文末尾または巻末に掲載する。23-1 号以降も引き続き投稿、特集企画、博士論文要旨の提供をお願いしたい。

2. 国際交流委員会の活動について

- ・ 11 月末の韓国中東学会国際会議には、会員個人レベルで参加し、学会として特別な支援は行わない。ただし、参加者にはニューズレター 109 号への参加報告寄稿を依頼する。（ 14～24 ページに関連記事）

3. 第 11 回公開講演会について

- ・ 11 月 18 日の開催に向けて順調に準備が進んでいる。（ 12～13 ページに

関連記事)

4. 2007年度公開講演会計画および学校教育における中東理解推進プログラムについて

- ・ 来年度も本年度同様、2回の公開講演会を企画する。うち1回は「日常的ななか中東を掘り起こす(3) 世界史教育と中東・イスラーム」と題し、本年度の企画を継続・発展させる形で、10月27日(土)に信州大学で実施する。また、もう1回は「中東・イスラーム世界の素顔を知る」をテーマに、6月30日(土)に千葉大学で開催する。なお、第1回・第2回とも、科学研究費補助金による助成を申請する(申請済)

5. 地域研究学会連絡協議会の活動について

- ・ 本学会が幹事学会となっている地域研究学会連絡協議会の06年度総会が10月22日(日)に大東文化大学信濃町校舎で開催された。その席上、加盟各学会に対して、協議会ホームページへのリンク要請があったので、本学会からもリンクする。
- ・ 地域研究学会連絡協議会では、事務局が総会の招集、ウェブの管理、ニューズレターの発行などの事務を担当しているが、05年12月から2年の任期で事務局長を務めている加藤普章大東文化大学教授(日本カナダ学会)が07年8月から在外研究となるため、07年8月から11月の間、本学会に事務局長代行を依頼したい旨の打診があり、理事会としてこれを受諾した。一方、次期事務局(任期は07年12月から2年間)を本学会が担当すべきかどうかについては、次期理事会の審議に委ねることとした。
- ・ 07年3月2日(土)に日本学術会議講堂で開催される日本学術会議地域研究委員会主催(地域研究コンソーシアム、地域研究学会連絡協議会共催)のシンポジウム「地域研究の最前線 知の創成」の広報依頼があり、本学会としてもホームページ等で適宜広報協力を行うこととした。

6. 日本中東学会奨励賞について(8~9ページに関連記事)

- ・ 審議のうえ、日本中東学会奨励賞規定および選考細則を決定した。また、評議員による候補作の推薦にあたっては、候補作のどの点が優れているか、必ず言及してもらうこととした。

7. 2007/2008年度(第12期)役員選挙の日程について(1~2ページに関連記事)

- ・ 選挙管理委員4名を指名する一方、選挙日程を決定した。

8. 会員動向

- ・ 本年度第一回理事会から第二回理事会までの間の新入会員32名の入会、退会希望者8名の退会を承認した。
- ・ 日本中東学会細則1-3に従い、事務局からの度々の注意喚起に加え、昨春

の前会長・現会長による長期滞納会費納入依頼、さらに今秋行った最終勧告にもかかわらず、長期にわたって会費を滞納し続けてきた会員 24 名を除名した。

9. 2007 年度年次大会準備報告 (2~8 ページに関連記事)

- ・ 2007 年度年次大会の準備は、着実に進んでいる。
- ・ 恒例となっている韓国中東学会からの招聘については、理事会から年次大会実行委員会に大会期間中の対応を依頼する。また、NIHU プログラム「イスラーム地域研究」と協力して招聘する可能性を探る。韓国側には、11 月末の韓国中東学会国際会議の席で、三浦会長から正式に通知する。

10. その他

- ・ 中東研究文献データベースは来年度以降、NIHU プログラム「イスラーム地域研究」と協力して運用していく。このため、平成 19 年度の科研費申請は行わない。

第 11 回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす

(2) 地方における中東・イスラーム」報告

2006年11月18日(土)13:00-18:00、山口市民会館小ホール(山口市中央2-5-1)において、第10回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(1)教育現場の中での中東・イスラーム」を引き継ぐ形で、平成18年度文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費による補助を受け、日本中東学会を主催とし、山口県、山口県教育委員会、JICA中国国際センター、山口県高等学校教育研究会社会部会を後援とする第11回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(2)地方における中東・イスラーム」が開催された。その目的は、日本と中東との接触が進む過程で蓄積されてきた、日常生活のレベルにおける中東・イスラーム関係の情報と知識を発掘することにあった。

内容は、(1)講演「地方における中東・イスラーム：尾崎三雄氏の事跡を中心に」と(2)パネル・ディスカッション「日常のなかの中東・イスラーム」から構成された。「講演」では、戦前1930年代に日本人農業技術者として初めてアフガニスタンに長期間滞在して技術指導を行いながら、現地に関するさまざまな情報を集め克明な記録を残した山口県出身の尾崎三雄氏の事跡に関する3つの講演(臼杵陽日本女子大学教授「第二次世界大戦中のイスラーム研究と日本」、鈴木均日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員「尾崎三雄の見たアフガニスタン」、清

水学元一橋大学教授「インド世界とアフガニスタン」)がなされ、「パネル・ディスカッション」では、中東を専門とする研究者と大学院生、山口県高校教員、山口県高校生をパネリストとして、私たちの日常における中東・イスラームとの関係について意見交換が図られた。(司会は加藤博一橋大学大学院経済学研究科教授)。なお、本企画に連動し、高校生による研究発表会「山口から見た中東、イスラーム」(11:00-12:00)が、また、尾崎三雄氏についての資料・写真展(11月1日-26日)「若きアフガニスタンの記録 農業技術指導者尾崎三雄氏収集資料を中心に」(日本貿易振興機構アジア経済研究所図書館と共催、於防府市図書館)が同時開催された。

参加者は必ずしも多くはなかったが、山口県の高校の先生方のご尽力で、実に多彩で、内容のある企画であった。とりわけ高校生の積極的な企画参加は、現地の報道機関にも注目されることとなった。フロアからの質問や意見も活発に出され、アカデミックな組織が主催して、立場を異にする教育、報道、NPO関係者が自由に意見交換をするはじめての試みであった第10回公開講演会に引き続き、今後の同種の企画を実施する際に参考とすべき、貴重な情報とノウハウが蓄積された。

(加藤 博)

日本中東学会年報(AJAMES)編集委員会から

1. 23-1号への投稿を締め切りました。

去る12月20日に23-1号への投稿を締め切りました。論文13本、研究ノート2本、資料紹介1本の投稿をいただきました(合計新規16投稿)。うち6本が外国語での投稿でした。日本中東学会年報の国際化のため、今後とも外国語での投稿を積極的にお待ちしています。23-1号の刊行は、本年6月を予定しています。

2. 22-2号の進捗状況

本来、2006年12月を予定しておりました刊行が、諸般の事情により年を越してしまいました。2月中にはお手元にとどけられるように鋭意作業を進めておりますので、どうかしばらくお待ちください。22-2号には、論文4本のほか、加藤博会員のとりまとめによる特集 Study of Regional Diversity in Egypt from Multi-Perspective Views 等が掲載される予定です。

3. 次の締め切りは6月20日です。

23-2号(2007年12月刊行予定)の投稿締め切りは、6月20日です。論文、研

究ノート、書評の投稿、さらに中東研究博士論文要旨への情報提供など、よろしくお願ひします。投稿規程は学会ホームページよりダウンロードすることができますので、ご利用ください。

4. 科学研究費補助金（研究成果公開促進費）についてのご報告

近年、日本中東学会は年報の出版経費の約半分を科研費の研究成果公開促進費によって充填して参りました。本年度も 120 万円の科研費を交付されました。科研費による学会誌出版助成の審査にあたっては、当該雑誌の国際性（実質的には欧文率）がもっとも重要な要素として評価されます。幸い、日本中東学会年報の欧文率は近年は 60% 以上に達しており、人文社会分野の雑誌としては少数派の「欧文誌」として審査されるにいたっております。また、国立情報学研究所 CiNii を通じての電子化なども評価されているところです。

しかしながら昨今、科研費をめぐる状況は大変厳しくなっています。まず、来年度より直接出版費の競争入札が義務付けられるものとみられています。専従の編集者をおかず、編集委員の手弁当と特定の印刷屋さんのもとでのノウハウの蓄積によって行われてきた編集作業が、そのような状況のなかで維持できるのか、大いに不安のあるところです。この動きと直接間接に関係すると思われる研究成果公開促進費交付対象事業への「実地検査」（任意）も行われ、本学会事務局・編集委員会も、1月18日に学術振興会からの委員を迎える予定となっています。今後とも科研費獲得には努力をしてみますが、これまで複数年にわたって内定していた学会誌助成決定の方法が見直されることもあいまって、厳しい状況が予想されます。今後とも理事会・編集委員会などでの議論を通じ、この問題への対応を検討してゆきますが、以上のような状況にありますことをご報告いたします。

（日本中東学会年報（AJAMES）編集委員長 林 佳世子）

第 15 回韓国中東学会国際会議参加報告

第 15 回韓国中東学会国際会議「中東との新たな協力関係を求めて」

三浦 徹（日本中東学会会長 お茶の水女子大学）

11月29日から12月1日までの3日間にわたり、韓国中東学会(KAMES)国際会議「中東との新たな協力関係を求めて」がソウルで開催された。KAMES では春に国内メンバーによる年次大会を、10月に国際大会を開催する方式をとっているが、今回は、韓国外務省が主催する韓国・中東協力フォーラム（第4回）との合

同会議で、主催者には韓国イスラム研究協会（KAIS）も加わり、協賛には、韓国交流基金（KF）、韓国国際経済政策研究所(KIEP)をはじめ 7 団体が名を連ねていた。中東や東アジアをはじめ海外から 31 名を招聘し、9 つのパネルからなり、会場は明洞のロッテホテル、プログラムはカラフルな多色刷り、プロシーディングスが 3 冊、昼夜には協賛団体によるパーティーが催されるという豪華版であった。JAMES からは、研究公募に採択された若手研究者など 8 名が参加した（各パネルのテーマと JAMES 会員の発表題目は本稿末を参照）。

初日のオープニングパネルでは、副題として「東アジアからの比較の視点」を掲げ、アジア中東学会連合を構成する日本、中国、韓国、モンゴルからそれぞれ問題提起を行った（冒頭に予定された中国中東学会楊会長代行の報告はキャンセル）。日本中東学会からは、酒井啓子理事（国際交流担当）が「日本とアラブとの認識のギャップの克服」と題する報告を行った。中東に対する日本の外交政策、湾岸戦争とイラク戦争後の変化を主題とし、アラブ諸国の人々がもつ日本への好感（経済力とそれを背景とした国際社会での主導的位置、アジアとしての共感、そこでは米国による原子爆弾の犠牲となったことも共感に通じている）が、イラク戦争後の自衛隊の派遣などの親米路線によって落胆に転じていることを指摘し、つぎのような日本とアラブの双方に存在する認識のギャップの克服に取り組む必要を提起した。アラブ側についていえば、日本に関する情報や知識の 9 割は欧米を経由したものであり、他方で日本語資料を用いる日本研究はもっぱら茶や能や源氏物語といった古典文化を対象とし、「生きた real 日本」とのギャップがあること。例えば、大川周明に関心をもつアラブ人の研究者はもっぱらコーランの翻訳者、イスラムの理解者として彼を位置づけ、急進的右翼としての側面が無視されていること。日本側にも、アルカーイダらの反米主義と戦前日本の自爆攻撃（神風特攻隊）とを同一視する論調があり、日本人自身が戦前の歴史や西洋とアジアの狭間にある自らのアイデンティティをいかに語るかということが問われていると結んだ。

モンゴル中東学会ニヤムザグド会長は、モンゴルと中東との経済・外交関係の各方面での展開、特に近年のイラン、トルコ、イスラエルとの経済関係やツーリズムを通じた交流などの課題を示した。韓国からは 2 名の報告があり、イスラム研究協会 SONG Kyung Keun 会長が近代以前からの中東との交流史を報告したあと、KAMES の CHOI Chang Mo 会長は「韓国からみた文化協力の展望」と題し、中国と日本はすでに長い外交関係をもち、韓国にとって実践的な課題は中東との文化面（ソフトパワー）での協力関係を築くことであるとし、出版物とともに、インターネットやテレビ・映画を通じた接触や交流の例として、日本でも昨年大ヒットした韓国の歴史ドラマ「チャングム（大長今）」がエジプトで人気を博していることを挙げ、韓国と中東との歴史文化の「相互・共通」の理解を進めていく

ことを提言した。

2 日目は、午前中に「グローバル化時代の中東との社会経済協力関係」という主題で、5 名のパネリストが報告した。パネルに先立ち、韓国の外務副大臣 YU Myung Hwan 氏とアラブ思想フォーラムのザワーヒー氏が挨拶した。Muhammad Qattan (クウェート) はイスラム金融ビジネスの世界大の拡大について、Paul Aart (オランダ) はイランとサウジアラビアからみた中国の国際的役割について、清水学は中東とロシア、インド、中国との関係に着目したユーラシア経済の視点を、Awatef Mohammad Abdel Rahman (エジプト) は市民社会とメディアの関係について、Mohammad Abdul Aziz Alahihi (UAE) は UAE と韓国の経済関係について、それぞれ報告を行った。いずれも 15 分という制限時間では収まりきらず、報告者にも聴衆にも不満が残った。

午後は、3 会場にわかれ 6 つのパネルが平行して行われた。私が参加したのは第 2、第 6 パネルで、いずれも 40 名前後の聴衆をあとめ、手慣れた司会の技によって、にぎやかなパネルとなった。本会議の主題との関係でいえば、CHOE Youn Cho のイラク問題についての韓国の新聞 4 紙の報道分析や、アラブ諸国 (レバノン、ヨルダン、イラク、エジプト、UAE) におけるアンケート調査にもとづく韓国のイメージの研究報告のふたつが興味を引いた。前者では、4 紙とも韓国との関係が報道の中心となり、韓国軍のイラク派遣についての論調が真二つに分かれたことを指摘した。後者では、情報のチャンネルとしてはテレビの影響が大きいこと、韓国製品と韓国イメージには相関関係があること、イラク派兵は全体としては関心が低く、米軍と共同軍事行動をとっているという誤解が 40% にも上ることなどが報告された。この研究は、韓国のアラビストと社会学者の研究チームによる調査で、日本ではこのような具体的な調査がなされていないだけに興味深く聞いたが、韓国人研究者から調査サンプルの数が少なく偏りが著しいという批判も出されていた。

3 日目は、午前に「プラント輸出とエネルギー政策」に関するパネルが行われ、企業などの現場にいる方からの報告がなされ、午後はエクスカージョンが実施された。

韓国の国際大会に参加したのは連続 3 年になるが、今回はとくに「韓国パワー」を見せつけられた感がある。なによりも、外務省との共催で「韓国・中東協力フォーラム」との合同会議となったことによる。このフォーラムは、2003 年に始まり、カイロ、ソウル、アンマンをへて今回が 4 回目となった。韓国にとっても日本にとってもイラクへの軍の派遣は大きな転換であり、中東からの石油輸入のビッグフォーは日米韓中の 4 カ国であるということからも、中東と東アジアの関係は中東研究全体にとって、ますます重要になってくるだろう。その点で残念なのは、中国中東学会 (CAMES) からの参加が 2 名だけであったことである。日本政

府によっても「日本・アラブ対話フォーラム」や「イスラム世界との文明間対話」といった文化的対話が実施され、JAMES の会員も個々に協力をしているが、学会とのジョイントはなされていない。2 日目の総括パネルで JAMES 会長としてコメントを求められたとき、「外務省などとの共催により研究者だけでなく外交や経済の実務者を含む幅広い参加をえたこと」「10 年前には歴史文学と現代政治経済が中心であったが、トピックの点でも研究手法の点でも多様になっていること」の 2 つにおいて画期的な会議であると述べた。偽らざる感想でもある。

* * *

PROGRAMS

November 29

Special Panel: Searching for a New Partnership with the Middle East: Comparative Perspectives from East Asia

Keiko SAKAI, Searching for a New Partnership with the Middle East: to Overcome the Perception Gap between Japan and the Arabs

November 30

Panel 1: Socioeconomic Cooperation with the Middle East in the Globalization Era

Manabu SHIMIZU, BRICs and the Middle East: A New Perspective in the Eurasian Economy

Panel 2: Democracy and Political Development in the Middle East

Noriko SATO, The Peace of the Middle East and the Syrian Foreign Policy

Panel 3: Cooperation for Political and Economic Development between the Middle East and Asia

Yasumasa KURODA, A Preferred Future Perspective: Northeast and West Asian Community-building toward a Stable Democracy for Energy and Environmental Security

Panel 4: Foreign Policies, Diplomatic Relations, and Security Strategies toward the Middle East in Comparative Perspectives

Bukhary Essam, Toward a New Partnership between Asia and Gulf Cooperation Council Countries in Science and Technology

Panel 5: Oil Resource, International Cooperation, and Transnational Markets

Shinsuke NAGAOKA, The Emergence of Islamic Finance in the Modern World:
Understanding its Theory and Practice, and Reconsidering Islamic Economics

Panel 6: Evaluating and Developing Civil Society in the Middle East

Reiko HAYASHI, Myths and Realities in Population Trend in the Middle East

Panel 7: Historical and Cultural Perspectives on Building a New Partnership with the
Middle East

Maria KOSUGI, Japanese Comprehension of Islam: An Inquiry on the Translations of
the Qur'an from the Taisho era to Contemporaries

December 1

Special Panel: A New Partnership for Plant Exports and Energy Policies on the Middle
East: Experiences and Problems from Company Executives and Field Experts

The 4th Korea-Middle East Cooperation Forum and 15th International Conference of the Korean Association of Middle East Studies: Searching for Partnerships with the Middle East

Yasumasa KURODA (University of Hawaii at Monea)

The 15th International Conference of KAMES and the Fourth Forum for Korea-Middle East Cooperation opened in Lotte Hotel, Seoul on the 59th Anniversary of the day UN Resolution 181 passed in 1947 that resulted in the protracted conflict of the Middle East. KAMES, in cooperation with the Ministry of Foreign Affairs and Trade, selected “Search for a New Partnership with the Middle East: Comparative Perspective from East Asia” as this year’s three-day conference theme. Eight JAMES members were invited, including four graduate students. Although the temperature was colder than in Tokyo, the conference was held in the warm atmosphere of friendship and hospitality provided by the organizers. In addition to Arabs and East Asians, Iran, Netherlands, Russia and USA were represented by at least one representative each. Such an international meeting without Israeli representation would have been a well-nigh impossibility in the United States.

The Conference lasted two days and the third day was spent on a police-escorted bus tour of the city for some. For others, sessions on practical aspects of doing business in the Middle East were held in the morning. Many members of the Middle East delegations were diplomats and officials in addition to scholars. This was the second conference this reporter attended in which participants were transported by police-escorted bus in over 40 years of his academic life, the first being in Nakhodka during the Soviet days. This reporter's experience with organizing international conferences in the United States involving high government officials such as former prime ministers, cabinet members and others is that CIA, FBI and local police discreetly guard them in addition to SPs who accompany VIPs. It is intriguing to observe how other nations organize conferences. I was one of two scholars who participated in the morning tour of the city on the third day, others being officials that took us to the National Museum and Chang-gyung Palace, among other places. Guides at the Museum and Palace described the destruction of their national treasures during the Japanese colonial administration as if it were simply a matter of fact without any emotion.

The conference theme suggests presentations include not simply academic papers but also normative and position papers as well. The conference opened with greetings from participating organizations' presidents consisting of CHAMES, JAMES, MAMES, KAIS and KAMES. JAMES President Toru MIURA, after brief greetings, had Keiko SAKAI speak on the perception gap between the Arabs and Japanese in historical perspectives on the first day. She concluded by suggesting that apparent gaps between Arabs and what she calls "Real Japan" derives from how the Japanese themselves understand their own pre-war history. The MAMES President focused on trade while KAIS concentrated on Korean-Middle East relations history. The last speaker was the KAMES President who emphasized the role of soft or cultural (文化) power in international relations through mass media. A Korean TV drama 「大長今」 is very popular in Egypt today riding on "Korean Wave" [韓流]. Perhaps the fact that we see that the newly elected UN Secretary General is a Korean diplomat; Ban Kid-moon, may also be a manifestation of the emphasis Koreans place on cultural power in international relations. We ended the day with a welcome reception and sumptuous dinner in an elegant dining hall.

The second day started with greetings from Acting Minister Myng-hwan YU of Foreign Affairs and Trade followed by congratulatory addresses from Minister Adel Tweisi of Culture from Jordan and Secretary General Wissam Al-Zahawie of Arab Thought Forum followed by a plenary session, where four scholars, including JAMES

member Manabu SHIMIZU, and Under Secretary, Mohamed Abdul Aziz Alahihi in the Ministry of Economy and Planning from UAE, gave papers on socio-economic dynamics in East and West Asian relations in the era of globalization. Brief discussions followed the session before we adjourned for an elaborate luncheon.

Three panels consisting of political, socio-economic and international dimensions of the Middle East- East-Asian relations were presented in the first afternoon session. Each panel had four paper givers and discussants. After a brief coffee break, the second session on transnational markets, civil society and inter-regional cooperation composed of three panels and 10 papers ensued before we adjourned. The day ended with another dinner fit for diplomats and dignitaries.

The morning sessions of activities were divided into two groups, 1) two paper sessions presented by research institute researchers and experts in doing business in the Middle East and 2) city tour group arranged by a newly established UNWTO ST-EP Foundation in Korea. ST-EP stands for Sustainable Tourism Eliminating Poverty. The tour included major tourist spots and in the afternoon Sam-sung factory just outside of Seoul and those who attended paper sessions in morning joined the tour group. The final dinner was at a traditional Korean restaurant.

This year's KAMES meeting came in the aftermath of several important world events. Korea's demand for primary energy has not decreased this year, despite increased price of oil. Korea spent the same amount of dollars purchasing oil in the first half of 2006 as it did for all of last year. China is successfully acquiring energy resources in parts of the world where Korea or Japan are constrained to search. Korea depends on the Middle East for nearly 80 percent of its oil supply. The United States clearly lost its hegemony in the Middle East or for that matter, the world, as nearly all Neocons exited the Bush administration this year. The petrodollar lost the strength it had since the end of WWII. The year 2006 marks a watershed in the history in the Middle East in particular and the world in general. The KAMES 2006 conference was characterized by concerns for the restructuring of East-Asia and the Middle East relations. The future is murky when no one power predominates. Authors who dealt directly with the conference theme include Muhammad Qattan, Paul Aarts, Manabu SHIMIZU, Yasumasa KURODA, Oyunsuren Samdandash, Bilegsaikahn Munkhuu, Mohamed Abudul Aziz Alahihi and Mustafa Barghouthi. There was some tension over the old issue of what to call the Gulf that lies between Iran and the Arab states, but that ended rather quickly and the reporter failed to observe any emotional outbursts throughout the Conference.

Many speakers expressed appreciation for the host organizations. To accommodate the needs and desires of participants from so many different countries and positions is a herculean task that the organizing committee did quite well. Much of the Middle East was represented, with the possible exception of two non-Arab countries. Although a few Iranians were present, they played no active part as Israelis were totally absent. Not only were so many countries represented, but a wide range of age cohorts were present. Confusion often exists where many different nationalities are assembled. If there were any room for improvement for future conferences, perhaps closer attention could be paid to detailed programs specifying times and places and instructions for participants given out upon arrival. It is difficult to coordinate several organizations cosponsoring a conference. Some universities in the United States have a conference coordinating office whose specialists assist any organizations in the university community interested in organizing international conferences from hotel accommodations to name tags and city tours. Academic institutions should have such specialists who assist scholars, since they are not familiar with how to organize conferences.

This first visitor to Korea has learned the importance its people and government attach to cultural power in international relations and came home enriched with different world perspectives. Komapsunnida indeed to the Korean hosts for their timely efforts to organize such a memorable conference and for graciously inviting eight of us from JAMES.

まばゆくて暖かい知的交流

小杉 麻李亜(立命館大学先端総合学術研究科博士課程)

第15回韓国中東学会国際会議が開催され、筆者は「中東との新たな協力関係構築への歴史的・文化的視角」のパネリストとして参加した。

初日に到着して、最初に目がくらんだのは会場と来賓のゴージャスさである。最上級のホテル、シャンデリアがまばゆい「孔雀の間」や「翠玉の間」、美味しいコーヒーと何種類ものクッキーの山に囲まれ、大臣や次官、事務総長、大使の姿がひしめく。テレビの取材も入っていた。こんなのは聞いてない！未知な世界に突然放り込まれ、ショックで身体がこわばった（註・例年は日本の年次大会のように大学で開催されているようなので、これから参加予定の院生の方々のご安心を）。

しかし、日本、韓国、モンゴルの中東学会会長と韓国イスラーム学会会長、酒井啓子先生による特別パネルが始まってみれば、その不安は一気に溶け出した。

テーマ自体は「東アジアの比較の視角から中東との新たな協力関係を探る」という外交よりのものであったが、それぞれの先生方の言葉の端々からは学究の深みと真摯さがほとばしっていた。対話の中からは、4つの国の中東学会がこれまでに築いてきた絆と温かな交流関係が感じられた。同時に、国境を越えて実際に顔を合わせてみることではじめて実現する研究交流を今まさに目にしているという興奮もあり、楽しい気分は急激に増した。パネルの終了後にはパーティーがあり、韓和洋折衷の立食形式でハラル・フードもあった。

2日目は、午前のパネルが大会場でおこなわれた後、3つの会場に分かれた。各部屋30席規模で、発表時間はパネリストの人数によって変化があった。時間が押ししてしまった場合には、10分前後に短くまとめるよう要請される場合もあった。

筆者の参加したパネルは、Myongji大学のHee Sun Cho先生が議長を務めてくださり、モンゴルの院生とスーダンの外務省次官との3人からなっていたので、時間的にはゆとりがあり、1人25分前後の報告時間がもらえた。「モンゴル・トルコ間の交易関係」、「スーダンの社会と文化」、私自身の「日本におけるクルアーンの翻訳」とテーマはバラバラであったが、百戦錬磨のCho先生がフロアを含めたパネル全体を優しく生き生きと魅力的にまとめてくださったので、パネリストたちは自分の研究の成果をのびのびと伝えることができた。Cho先生は特に今回の会議に日本から年若い大学院生(2人)の参加があったことを強調し、是非韓国の院生にも参加を激励したいとはりきっておられた。

パネルを無事終了した後は、研究内容が直接的に重なっている先生方や院生たちはもちろんのこと、たまたま報告に居合わせたMAMESの会長や、「精神に異常をきたした人がクルアーンの翻訳をできるのか」という観点から大川周明に興味を持ったオマーン大使など、さまざまな人たちからコメントを聞くことができた。また、クルアーンの新たな韓国語訳に取り組み、ザマフシャリーとイブン・カスィールのタフスィールを愛するLee Myong Won先生とは短いながらも意義深い交流ができた。

2日目の夜は韓国料理のフルコースで、3日目にはサムソン社見学や韓国の伝統芸能、伝統料理を楽しむ市内ツアーがおこなわれた。異国の地で異国の研究者たちと交流するほかにも、普段はなかなか一緒に過ごす機会のない日本の研究者の方々と交流できたことも楽しかった。

実行委員会の皆さんは、準備の段階から開催中を通じて細やかな心遣いと温かな歓迎を示してくださった。折に触れて声をかけ、こちらの緊張をほぐして下さり、特に日本語と英語をたくみにあやつる学生スタッフの柳さんは、空港で出迎えてくれホテルで別れるまで身近な立場で親切に接してくれた。心から御礼申し上げます。

第 15 回韓国中東学会大会参加記

佐藤 紀子(釜慶大学)

第 15 回年次大会は私が今まで参加した韓国の学会の中で、規模、参加者の多様性において最大のものであった。現地での学術体験に限りがあるものの、韓国在住者としてこれまでに観察体験した韓国事情を交えて、本大会に見られる 2 つの特徴をここに紹介しようと思う。

韓国-中東協力の第 4 フォーラムと合同開催、更に MOFAT の協賛ということもあり、第 1 パネルと三日目の特別パネルでは、日・中・韓北東アジア三国のエネルギー資源に関わる外交政策及び韓国の LNG 関連ビジネスについて討論がなされた。一般的に、韓国における地域研究は中東研究も含めて、韓国と当該社会の関わりを中心として論じられる傾向にある。産業貿易の分野での国際化推進とともに 1990 年代に韓国政府の支援を得て各地域の学術専門家が養成されて来たという歴史的経緯が、今日の中東研究のあり方に関係しているものと思われる。LNG 関連ビジネスに韓国人発表者の議論が集中した際、韓国人以外の参加者は、人材育成、文化展やディワーニーヤのような中東文化を尊重する会合で相互理解を深める多角的戦略が業務提携の機会を拡大すると主張した。韓国では一点に人々の関心が集中する傾向があることを考えると、この対比は興味深い。

外国人発表者を中心としたパネルは上記とは異なる特徴を示し、この学会の多彩性を窺わせた。例えば、第 2 パネルは中東各地域の居住者の側に立ってデモクラシーと平和の問題に照準を定めた。

今回、韓国中東研究の特徴を垣間見ることが出来、更に数多くの参加者と歓談する機会を与えて下さった主催者の方々に感謝の意を表したい。

初めての韓国中東学会

長岡 慎介(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程)

発表者の一人として名を連ねることになった第 15 回韓国中東学会国際会議は、初めての国際会議参加、初めての海外口頭発表、初めての韓国、初めての本場激辛韓国料理...と私自身にとって初物づくしであった。以下では、一発表者の視点から会議全体を振り返ってみたい。

今回の会議ではエネルギー資源や海外投資に関する経済系の発表が多く組まれていたが、自らの発表テーマであるイスラーム金融に対する韓国での関心の度合いは渡航前から量りかねていた。しかしながら、幸いなことに多くの方々から反

応があり、その関心の高まりを実感できた。特に、私の発表のディスカッサントを務めてくださった Ji Hyang Jang 氏は、イスラーム運動の文脈の中でのイスラーム金融の政治経済学的な位置づけを研究されている若手の研究者であった。彼女が会議事務局の外国人参加者の窓口役になっていて早くから私の発表ペーパーを読んで下さっていたことで、発表の細部にわたるまで丁寧なコメントをいただき議論をすることができたことは発表者冥利に尽きるといっても過言ではない。また、今回の国際会議は第4回韓国中東協力フォーラムを兼ねていたため、中東諸国からも多くの研究者が参加しており、現地の最新の経済動向を知ることができただけでなく、現地のイスラーム金融の専門家と交流できたことは望外の喜びであった。

最後に、これは以前の KAMES 国際会議の参加記でもしきりに言及があった点だが、ホストである韓国の方々から受けた温かいもてなしを挙げないわけにはいかない。特に、仁川空港到着から会議終了までお世話になった学部の学生の皆さんとは年も近いせいか、研究の話に限らずざっくばらんに談笑することができた。ここに改めて謝意を表するとともに、今回の国際会議参加を支えて下さった JAMES の方々にも御礼を申し上げたい。

第 56 回パグウォッシュ会議年次大会に参加して

パグウォッシュ会議とは 1955 年の「ラッセル・アインシュタイン宣言」に端を発する、核兵器廃絶、戦争根絶をめざす科学者の運動だが（第 1 回会議は 1957 年）、今回はその大会がカイロで開かれるということで参加してきた。

筆者も最近まで知らなかったのだが、パグウォッシュ会議は近年では核兵器反対という本来の課題に取り組むと共に、通常兵器や地雷の問題、あるいは食糧危機や HIV といった人類にとっての「非軍事的脅威」の問題にも関心を向けるようになってきている。また、戦争を根絶するためにはその原因を取り除かなければならないという問題意識から、国際政治や地域紛争に関する議論もおこなっている。今回の大会がカイロで開かれたのも、今後の世界平和を構想する上で中東の問題を避けて通るわけにはいかない、という認識に基づくもので、大会テーマは「移行期の地域 中東における平和と改革」であった。会期は 2006 年 11 月 10 日から 15 日、約 40 カ国から 180 人以上が集まり、日本からは鈴木達治郎（核問題・原子力政策）、勝田忠広（同）、須藤隆也（軍縮問題）、向和歌奈（国際政治・パグウォッシュ青年部）、それに栗田（中東研究）の 5 人が参加した。

大会はホスト国エジプトの外相による挨拶やアラブ連盟事務局長アムル・ムー

サーによる基調講演で始まり、その後、「中東における安全保障と民主化」「イラクの今後」「レバノン・パレスチナ・イスラエル問題」「カシミール問題」「中東における大量破壊兵器」等のテーマでパネル・セッション（これは全員が傍聴）が持たれた。全参加者は同時に、「核不拡散と核廃絶」「中東和平プロセス」「イスラームと西洋」等のテーマに関する6つのワーキング・グループのいずれかに割り振られ、これらのグループでは、非公開・少人数での討論という形式を生かして自由な意見交換がおこなわれた（プログラムおよびペーパーの一部はパグウォッシュのホームページ <http://www.pugwash.org> で公開されているので、さらに関心のある方は参照されたい）。

大会を通じて最も強い印象を受けたのはやはり、パグウォッシュ会議という運動の性格を反映して、イランやイラク、パレスチナ、あるいはイスラエルといった地域から、こうした機会でもなければ会うこともないであろう多種多様な背景の人々が集まり、立場の違いを越えて、何とか対話を成立させようとしている姿だった。きわめて鋭い政治的対立を引き起こしかねないような議論の場でも、参加者たちの態度は総じて（筆者などはむしろ歯がゆさを感じてしまうくらい）自制されたものだった。

同時に印象的だったのは、こうした極度に自制された雰囲気での会議ではあってもやはり、議論の過程を通じて、中東における唯一の事実上の核保有国であるイスラエルの立場の問題性というものが、いやおうなく浮き彫りになったことである。参加者の中からは、「イスラエルはこれまで、自らはNPT（核不拡散条約）に参加しない一方で、他の中東諸国がNPTに縛られて核兵器を持っていないことによって得をする、いわば『ただ乗り』政策を続けてきた。だが、今やイスラエルのこの政策がNPT体制全体を掘り崩し、ひいてはイスラエルの『安全』自体を脅かし始めているのではないか？」「核兵器を持っているともいえないとも言わないイスラエルの『曖昧政策』を、今はイランが模倣し始めているのではないか」といった鋭い指摘があった。核拡散やNPT体制の形骸化は最近（北朝鮮の核実験のためもある）日本のマスコミでも関心を集めているが、こうした問題を考える際にもパレスチナ問題を避けて通れないことを改めて認識させられた。

なお、会議の中で正式に取り上げられることはなかったが、会期中、日本政府が「日本国憲法は核兵器の保有を禁じているわけではない」という政府見解を発表し、これがエジプトの英文紙『アフラム・ウィークリー』紙上で報じられて、会議参加者の間で大きな関心を集める、というできごとがあったことを付け加えておきたい。（筆者は持参していた憲法9条英訳を配布して、対応に努めた！）日本政府・日本国民は意識しなくても、日本の不用意な「核武装論」は中東でも報道され、中東の人々の日本イメージを確実に変えつつあるのである。

（栗田 禎子）

寄贈図書

【単行本】

公開シンポジウム「エジプトを護る」実行委員会編集『公開シンポジウム エジプトを護る - - 保存の世紀を迎えて：文化遺産保存の実践と今後 - - 』アケト、2006.

北村皆雄、新井一寛、川瀬慈編『見る、撮る、魅せるアジア・アフリカ！ - - 映像人類学の新天地』新宿書房、2006.

小杉泰『興亡の世界史 06 イスラム帝国のジハード』講談社、2006.

『同志社大学 21 世紀 COE プログラム 一神教の学際的研究 文明の共存と安全保障の視点から 2005 年度研究成果報告書』同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)、2006.

【逐次刊行物】

Newsletter, No. 70, Istanbul: O. I. C. Research Center for Islamic History, Art and Culture, 2006.

『CISMOR VOICE』No. 5、同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)、2006.

『季刊アラブ』vol.119、日本アラブ協会、2006.

2007 年度会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。本年1月19日現在で未納の方には、本号ニューズレターに郵便振替払込用紙を同封させていただいておりますのでご利用ください。2007 年度以前の会費を未納の方はどうかお早めにお支払いください。未納分の払込確認後、当該年度の AJAMES をお送りいたします。年次大会での研究発表および AJAMES への投稿には、当該年度の会費納入が条件になります。なお、3 年以上会費を滞納された場合は会則により会員から除名される場合がありますので、ご注意ください。

事務局より

2007年最初のニュースレターをお届けいたします。遅ればせながら、事務局一同、新しい年に会員の皆さまの益々のご活躍、ご多幸をお祈り申し上げます。

振り返れば、2006年は日本の中東研究にとっても、本学会にとっても大きな節目となる年でした。前号ニュースレターで臼杵陽、佐藤次高両会員にご解説いただきましたように、「国立中東研究所」構想をもとに1994年に設立、国立民族学博物館に附置されておりました地域研究企画交流センターは3月末で廃止となり、旧地域研の現員9名は2006年4月に京都大学に新設された地域研究統合情報センターに異動いたしました。一方、4月以降人間文化研究機構内には「地域研究推進センター」が設立され、新たに「イスラーム地域研究」が発足しています。さらに文部科学省による「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」の公募も行われ、中東に関する2つの研究課題が採択されました。このように、2006年には中東やイスラームの地域研究に関わる新たな枠組みの共同研究が誕生し、本学会のメーリングリストにも、以前に増してたくさんの研究会情報、イベント情報が流れております。会員の皆さまも、どの研究会に参加すべきか、限られた時間のなかで嬉しい悲鳴をあげておられるのではないのでしょうか。

また、昨年は本学会にとっても、AFMA第6回東京大会の開催やWOCMESアンマン大会へのパネル派遣、さらに初めて年2回の公開講演会開催に取り組むなど、大きなイベントが目白押しの1年でした。会員の皆さまのご協力に心より感謝申し上げます。

とはいえ、こうしたイベントを実施するための資金を、ほぼすべて外部公募資金に頼っているのが本学会の実情です。しかるに、本号ニュースレターで林佳世子AJAMES編集委員長が報告しておりますとおり、諸般の事情から昨秋以降、これまで本学会が頼ってきた外部公募資金の採択条件、交付条件は一気に厳しさを増しました。すでに複数年度の交付を内定されていたAJAMES科研費(研究成果公開促進費:学術定期刊行物)についても、あらためて来年度審査の参考とすべく、補助金を交付された場合の「経理管理及び監査体制」に関する資料の追加提出を求められるなど、今後どこまで外部資金に期待できるかはまったく未知数です。また、交付が決定した場合には一般競争入札が原則となるなど、これまでは予想すらしなかった様々な困難に直面する可能性もあります。

そんなわけで、2007年の日本中東学会を取り巻く状況は極めて流動的ですが、事務局といたしましては、会員の皆さまのご理解・ご協力を得て、本学会の一層の発展に向け、微力を尽くしたいと考えております。現事務局の任期も本当に残りわずかですが、なにとぞよろしくお願い申し上げます。(飯塚 正人)

- ・本号ニュースレターには、来年度年次大会の参加費、懇親会費、弁当代のための郵便振替用紙を同封させていただきました。それぞれの金額・振り込み締め切り等については3ページをご覧ください。
- ・本年度より隔年となった会員名簿の発行を今年5月に行います。本号ニュースレターには、07年度版会員名簿作成のための、会員個人情報データおよび会員名簿に掲載可能なご自身の情報項目についての意向調査票が同封されております。内容をご確認のうえ、必要があれば会員個人情報データをご更新いただき、同封の事務局宛て封筒にて、2月28日までにご返送ください。

日本中東学会ニューズレター 第 109 号

発行日 2007 年 1 月 19 日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
飯塚正人研究室気付
TEL & FAX 042-330-5543
E メール：james@aa.tufs.ac.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/index.html>
郵便振替口座：00140-0-161096
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店
普通 No. 5346808